青山同窓會報

《発行所》
青山同窓会
〒951-8127 新潟市関屋下川原町 2-635
新潟県立新潟高等学校内
TEL 025-266-5268
FAX 025-266-5268
《編集・発行人》
上村光司
《印刷所》
オリオン印刷株式会社
〒950-0963 新潟市南出来島1-19-1
TEL 025-283-2151
FAX 025-283-3804

ごあいさつ

会長　上村光司（50回）

新しい年を迎えました。普段はあれやこれやと、くどいてばかりいても、年が替わると「今年はしっかりやろう」という気になります。暦を発明した先人の知恵でしょうか。皆様にとって良い年になりますよう、ご期待し、お祈りいたします。

何を書こうかと思いながら、以前の会報をながめていて気が付きました。会報の題字の地紋が桜でした。まことに迂闊（うかつ）な話で、桜は旧制の校旗にありましたが、今は松です。新旧の校章を組み合わせ、文字の形も変えてみましたが、いかがでしょうか。

ところで、先ごろ出来た百十周年の同窓会名簿で、私（50回）がずいぶんと前の方になっているのには、複雑な思いでした。氏名掲載分七一六ページ中の先頭から九五ページ目です。九十周年の名簿では五百十五ページ中の一一〇ページ目、百周年の名簿では六二八ページ中の一一二ページ目でしたから、またまた前へ押し出されたということです。新年早々縁起でもない話ですが、名簿は一ページに三九人(行)掲載、逝去者は姓名だけの一行四人になるので、逝去者の多い期ほどページ数が少なくなる、つまり前へ出されるという次第です。

それはともかく、その名簿の一番前の方では、三十八回生が大方今年で九十歳になられると思いますが。この期を含めてそれ以前のご卒業で住所が記載されている方、つまりご健在がはっきりしている方が一四六人いらっしゃいます。ご長寿をお祝いし、ご清勝のほどお願いいたします。九十周年の名簿で六八％のスペースを占めていた新制の皆さんが、百十周年では八二％になりました。名簿登録数は百周年の約二万五千人から今回三万五千人となり、まさに隆々、滔々（とうとう）と言うべきかと思います。昨年の十一月のころ「青山の底力って凄いんですね」という言葉を何度か聞きました。新潟の各界はもちろん、全国で、世界の各地で力量を発揮している皆さんに敬意を表し、いっそうのご成果を期待しています。

名簿についてもう一つ――第九ページの応援歌に誤りがありました。従来の名簿にも同様の誤りがあって、次回は注意しろと言われていたのに私の度忘れでトンネルしてしまいました。お詫びいたします。訂正をお願いいたしますところは▽「霞たなびく」で「銀舵」を「銀蛇」に、「独戦場」を「独擅場」に▽「丈夫」の「夕風」を「雄風」に▽「ただに血を盛る」で「弾の響き」を「霊の響き」に▽「今残星の」で「曉鳥」を「曉烏」に。とりあえず以上です。単なる誤植は別として、十年、二十年と通用されていると、それが本物みたいに化けますが、やはり原典は大事にしようと思います。

青山の旗のもとに

総務大臣政務官　衆議院議員
吉田六左エ門（66回）

青山同窓会の皆様、新年明けましておめでとうございます。旧年中はひとかたならぬお世話になりまして、本当にありがとうございました。本年も相変わりませずよろしくお願いいたします。

今年は羊どし、「羊群、獅子をも倒す」という故事があります。融和と団結を意味する松を形どった校章はこの故事にも相通じ、青山精神に最も触れることが出来ますが、我が青山のアイデンティティは一朝一夕で作られたものではありません。百年余の長きにわたり文武に優れ、反骨そして団結、進取の精神を先取り育みあって来たわけです。

世の中のインフラ整備が整い、本格的なIT先進国への取り組みをはじめていますが、今年は鉄腕アトムの生まれる年にあたりユビキタス時代に突入する年にもあたります。こんな時、先人の知恵、工夫、努力によって今がある思いがいたし、向かうこれからの進路の判断を誤らないようにすることが肝要かと思います。

新潟市に篠田新市長が選ばれて引き続き青山の旗を立て続けることが評価されましたことは大変喜ばしい限りです。

かつて、私が衆院選に当選させていただいた折、恩師、渡辺秀英先生から「国会、期、青山、旗」という書を頂戴いたしました。町村合併、政令指定都市、日本海側の首都に向けて新市長が努力されますが、これを支援するのは青山の旗であると確信いたしております。同窓生一丸となって獅子をも倒す勢いで今年一年ご活躍されることを念願いたしております。

ごあいさつ

新潟市長　篠田　昭（75回）

青山同窓会の皆さま、昨年十一月の新潟市長選では大変なご支援をいただき誠にありがとうございました。お陰をもちまして新潟市長に当選することができました。この紙面を借りまして厚く御礼申し上げます。

政党や労働団体などの後ろ盾がまったくなかった私にとって、青山同窓会有志のご支援が最大の支えでした。市民選挙・ボランティア選挙を掲げた私ですが、青山有志のご協力がなかったら当選は到底おぼつかなかったと思います。青山の強い絆を実感

した選挙戦でした。重ねて感謝申し上げます。

選挙戦では、青山の先輩でもある長谷川義明前市長がレールを敷いてくださった広域合併―政令指定都市づくりをきちんと仕上げることと、「雇用の場の拡大による活性化」と「安心・安全な暮らし」を新潟の地で実現することを訴えて参りました。また、合併のデメリットの懸念をなくす点からも市役所改革の重要性を前面に押し出しました。

「多くの市民から市政に関心をもってもらう市長選に」との気持ちは強かったのですが、「拉致報道」の陰に市長選が埋没したこともあってか、投票率が40%を切ったことは残念でした。その中での慰めは、これまで"風頼み"といわれてきた市民型ボランティア選挙が、低投票率でも勝利しうるとの結果を全国に提示したことでしょうか。

幸い市長にさせていただきましたので、これからは選挙での公約を一つひとつ実らせることで市民の信頼を得、多くの市民が参画するまちづくりを新潟で実現していこうと思っております。さらなるご助言やご支援をお願いいたします。

新潟の今年の課題としては広域合併を進めることが最重要と考えています。地方経済が低迷を続ける中、雇用の場の確保・拡大が新潟でも喫緊の課題です。「都市が産業をつくる」といわれる時代にあって合併は財政基盤の強化以上に大きな意味を持っています。五三万都市の新潟市が隣接十一市町村と一緒になり七七万都市が誕生すれば、新潟の拠点性は飛躍的に高まり、多くの都市型産業が生まれることが期待できます。その上、新潟は単なる合併にとどまらず政令指定都市という大きな目標があります。政令市になれば新潟の都市イメージはさらにアップします。

日本が人口減少時代を迎える中、新潟を訪れる交流人口を増やしていく取り組みが活性化の点から以前にもまして大切になります。この五月には万代島に朱鷺メッセも誕生します。これを機にコンベンション誘致に力を入れ、併せて新潟地域の魅力を掘り起こす「にいがた地元学」を提唱します。新潟はとかく「見せる場所がない」と言いがちでしたが、幸い十二市町村が一緒になれば越後の豪農文化や蒲原の原風景など大変な見どころが単一自治体に勢揃いします。これに新潟の食ともてなしの心を付加すれば、新潟の交流人口を飛躍的に増大することができると確信しています。

今後も青山で培ったチャレンジ精神を忘れずに市政運営に当たっていきますので、何卒よろしくお願いいたします。

篠田昭氏　新潟市長に当選

昨年十一月十日行われた新潟市長選挙で、本校同窓生、75回卒の篠田昭氏が当選した。

これは、長谷川義明前市長(61回)の任期満了に伴う選挙で、篠田氏は新潟日報社論説委員からの転身で出足が遅れ、無所属・無党派を押し通したことから当日の低投票率が気になり、苦戦が予想されたが、最終盤で運動に盛り上がりが出て当選にこぎつけた。

新潟市の、ほぼ二十年に及ぶ助役から市長への流れに違和感を覚え、「世代交代」「市役所改革」を唱えて立候補、「民間の力を生かした市政の改革を」と訴えて有権者の理解を求めてきた。当選が決まって、「市政改革と新潟の活性化をきちんとやっていく」と抱負を語った。一方新潟日報の号外では長谷川前市長が「公約に掲げた市政改革が実現できるよう、張り切って出馬した気持ちを忘れず、初志貫徹で頑張ってもらいたい。」と激励している。

最大の課題は十一市町村との合併と政令指定都市づくりに向けての取り組みということになろうが、現時点までにおいて(十二月末)、無難な滑り出しをみせている。

助役に加藤健一氏(68回)、収入役に長井義輝氏(71回)

篠田昭氏が当選した先の新潟市長選に絡み、空席となっていた助役らの人事が、新潟市議会の十二月定例会で確定し、助役に加藤健一氏(68回)、収入役に長井義輝氏(71回)が発令された。いずれも本校の同窓である。

篠田市長は民意に応える！

早福　卓（55回）

十一月十日の市長選挙で75回生の篠田　昭君が当選した。選挙事務所は勝利の紙吹雪が舞った。

十二年間も助役をしてゼネコンらに仕事を発注する指名委員会の長を務めていれば、業者は市長より助役を長れる。保守派の実働部隊は土建業界、革新派の実働部隊は労働組合が野合して渡辺選対を構築した。マスコミが論評したように自民党と公明党、会議所、医師会、市職労、市会議員の四十七名が推した渡辺陣営の優位は動かないとみられていた。九月に入って手を挙げてくれた篠田　昭君の決断に感激した。政党の支持は受けません、市民派のボランティア選挙をやると云う。75回の清水義晴君は選挙本部長として全体の指揮をとった。上村光司会長達と相談して篠田候補を支援する「有志の会」を創った。十月に入って長谷川市長が任期満了で引退する最後の記者会見があった。日報紙は高配した記事を書いて呉れた。市長選挙について改めて、後継指名はしない考へを明らかにした。「相棒をよろしく」とチラシに訴えた前助役陣営には打撃だった。更に「人柄、世代交代、清潔感」などを比較して選んで欲しいと述べた。六十七才で引退する市長と六十五才で出馬する助役陣営に「世代交代」は五十四才の篠田候補推薦の言葉に映った事は間違ひない。四選を阻止された長谷川市長の意地が滲み出ていた。十二月二十八日付の日本経済新聞に、市長選挙で果たした青山同窓会員の成果が載っていた。私も全く同感だ。市役所との関係や、会議所との付き合いで「魔除け」に前助役のポスターを貼った同窓会員の会社では「朝令」の社長挨拶では「75回生の篠田候補」をよろしくと挨拶があり、会社によっては篠田候補に職場回りを先導して呉れた。静かに力強く流れが変わって行った。

選挙戦の前日、明石通りの辻立ちに82回の東京青山同窓会事務局長日下部女史も冷たい雨の中で手を振ってくれていた。東京同窓会の栗林会長からも当選の喜びの電話が来た。新潟市内に住む一万三千人弱の青山同窓会員の多くの票は篠田市長当選の基を築いたと信じる。市民の目線で進める篠田市長の腕前を期待して止まない。

祈健斗

新潟市長選を終えて

清水　義晴（75回）

青山七五期の同級生篠田昭さんから「市長選に出ようと思うんだが、協力してもらえないだろうか」と相談を持ちかけられたのがお盆明けの八月二十二日でした。

大学卒業後、お互いに新潟に戻っていたこともあり、よく会い、よく知っていた間柄でもあったので、そう深く考えず協力を引き受けました。そのときは、誰か選挙にくわしい人が参謀のような役を引き受けるのだろう、まさか私が責任者のような大役を引き受けることになるとは夢にも思わなかったのです。

ところが、本当に人生は何が起こるのか、先のことはまったく分からないものです。私の事務所などで相談に乗っているうちに選対本部長などというたいそうな役目をやらざるを得ないような流れになっていったのでした。

もちろん、篠田さんの強い志に動かされたということが一番の要因ですが、私の中に、今までとは違った選挙、市民がヨコに手をつないだ新しい選挙をやることで新しい時代の流れが起こり、新潟が変るかもしれないという想いが芽生えていったこともあって、引き受けた以上すべてを賭けてやろうと思うようになりました。

ところが、いかんせん選挙にはまったく素人の私です、何をしたらいいかも分かりません。選挙にくわしい人や議員の方に聞きながら、学習しながらのスタートでした。

しかし、このことがまったくのマイナスではなく、多くの人の協力を得られる関係づくりにもつながっていきました。

キャッチフレーズづくりや広告、デザインのアドバイスをしてくださる方。政策面で協力をしてくださる方。チラシを配布するための地図作りを受けおってくださる方。選対本部長としての心構えやペース配分を教えてくださる方など、どれほど多くの方に助けられたか知りません。今振り返ってみて、まったくゼロからのスタートでよくやってこれたナァーとつくづく思います。はじめに知らなかったから何とかできたのであって、こんなに大変、大量な仕事があることが分かっていたらきっとこの役割を引き受けなかったことでしょう。

その中でも力になってくれたのが青山の同期生をはじめとする友達であり、ボランティアの方々でした。自分の仕事をなげうって家族ぐるみで協力してくれる友人や「私も命がけでやっているんだよ。お金をもらったらこんなことできないさ。」といって二週間も一人旗を持って弁天橋に朝立ちしたボランティアの女性など忘れることが出来ないでしょう。

はじめは苦労したボランティア集めも後半から終盤にかけて水かさが増すように、自然に増えていきました。私たちのハガキ、電話、街宣、ミニ集会、企業訪門などの選挙活動が少しづつ広がっているという実感が出てきました。

ところが、新聞では拉致問題があり、天候も異常に寒く、いまひとつ選挙ムードが盛り上がってきません。声の届いた人たちの確かな反応と、声の届かない人たちの無関心さの間に大きな溝があるようにこの頃感じていました。その溝がすこしづつ埋まり始めたと実感したのは十一月三日の告示後です。

新聞やTVも市長選挙について報じるようになり、街宣や電話で手応えを日々感じるようになっていきました。そうなるとボランティアの人たちにも熱が入ってきます。それぞれが自分の得手を活かしたポジションも定着してきて、ひとつの生き物のようにダイナミックな組織が出来ていきました。

これはイケル！と思ったのは最後の三日間でした。電話での応答が格段によくなり、街頭での反応も良くなり、篠田さんの元気や迫力も日増しについてきました。

まさに、二ヶ月間手づくりで一人ひとりが力を合わせ地道にやってきた活動が自然に増殖し始めたのです。

しかし、その間そんなに順調ではなく、何回も大きなヤマ場を体験させられました。その度に、必ずといってよいほどタイミング良く助けの手が入ったことには、今思っても天の助けというより他ありません。

今は篠田さんが当選した喜びよりも、負けないでヨカッタというホッとした気持ちがほとんどです。あんなにも多くの人に協力していただき、助けられ、この方々の志を無にしたらどうやってお詫びしたらいいだろうという重圧から開放されたこと、それだけで充分という気持ちです。

ここに、多くの青山同窓会の方々からご支援ご協力を頂いたことに紙面を借りまして心から御礼申し上げる次第です。

十一月十八日　北海道にて

平成十四年度 青山同窓会総会

昨年七月十二日（金）、例年通り青山同窓会総会がホテル新潟を会場に開催されました。今年の出席者は六百五十余名、ここ数年では標準的というか、微増というか、まずまずというところ。実行委員長福田実さん、副委員長北村幸輝さんと駒井早苗さん。ご苦労様でした。任期がもう一年あります。来年度も更なる盛会をお願いします。

総会では会長・校長あいさつの後、会務報告と予算決算。議事の中で、その他として今年度は山田校内幹事（69回）が定年退職のため、後任に木村正史（77回）と玉木正己（86回）両先生が就任、その紹介と承認が加わりました。

正確に数えたわけではありませんが、この総会時の参加者が例年より多かったように思います。いつもは懇親会の時間に合わせて来る方が多いので出足がもっと遅いはずなのですが。それにしても、次年度予算の説明のあたりになると殆どのテーブルでビールがおおっぴらに注ぎ回され始めます。さては早出の目的はそれだったか。もちろんお行儀が悪いなどと野暮をいう気はありません。イッテキクモノカハ。なお、宮沢校長は東京の公務出張から急遽駆けつけました。

総会の議事が予定より早く終わり、次は懇親会ですが、各期幹事の方々はこの段階ではまだまだ受付の手を抜くわけには行きません。本当に、昨年の百十周年記念行事でもーその何年も前からーお手を煩わせてきましたが、毎年の総会では会員券・ポスターの配布に始まって、当日はもちろん終わってからの清算にいたるまで全部各期幹事の仕事です。ありがとうございま

す。

懇親会は、駒井早苗実行副委員長の司会です。会長あいさつに続いて栗林貞一東京青山同窓会会長、長谷川義明新潟市長、吉田六左エ門衆議院議員にそれぞれ来賓あいさつをいただきました。

旧・新校歌斉唱。指揮波多野真理子さん（74回）、伴奏江口律子先生（63回）。江口先生「私がやるのはかまわないの。喜んでやるわよ。でも新しい人にやってもらった方がいいんじゃないの、やれる人はいくらでもいるんだから。」

乾杯の音頭は小林力三さん（32回）にお願いしました。三二回というのは大正十四年のご卒業で、卒業後に昭和と平成が丸々過ぎ去ったという実におめでたい長寿の方です。音頭をお取りになる前のメリハリの利いたおことばは、お年が信じられないほどの、現役そのものでした。さらに、先走りますが会の最後のメの万歳三唱は、青山同窓会副会長の小林亨さん（60回）でした。亨さんは力三氏のご子息であり、重ね重ねおめでたい組み合わせが実現したものだと感謝した次第です。

余興です。今回の趣向は津軽三味線ということで、奏者はこれも同窓生の高橋竹秀さん（101回）。高橋竹山の孫弟子で大聴衆を前に見事な演奏を披露してくれました。念のために用意したCDが瞬くうちに消えたそうです。その後、竹秀さんは秋に東京の青山同窓会総会でも演奏され、この春には文化庁の派遣事業で新潟高校の生徒にも演奏を聞かせてくれることになっています。

総会の懇親会は早めに切り上げて各期とも二次会に行くのがほぼ慣例のようです。例年それを見越して二次会用資金だの、二次会用酒だのを景品にしていますが、本年度も「越の寒梅」を用意しました。参加人数の多い期から順にあげましょう、ということになっていますが、昨年と今年、疑義が出ました。実際に総会に来ている「実」参加人数か、会員券が捌けた数の「名目」参加人数か、どちらを取るのかということです。数えているわけにはいかないから、という理由から名目の方でということになっていますが、ま、適当に、ではいけない、フェアーに、ということで。

寒梅を抱えた期も、徒手の期も、わらわらと、まだ夏の宵の新潟の街に散り、平成十四年度の青山同窓会総会が終了したのでした。

二〇〇二 東京青山同窓会 総会報告

〈会場に向かう私の胸は…〉

毎年十一月は東京青山同窓会の開催月。今年の楽しみは、第二部アトラクションの津軽三味線。私はこれまでテレビを通してしか聞いたことのない。それがナンと東京青山同窓会で聞けるとは。さらにそのうえ奏者は101回卒業のわが同窓生と聞き二度ビックリ。心わくわく、会場の全日空ホテルがある赤坂アークヒルズに向かう。

〈母校の今年の活躍に…〉

第一部は総会の部、恒例の会長・ご来賓などの挨拶の中で気を引いたのは、宮沢稔校長のお話の中で出てきた、各クラブの一年間の活躍状況。詳しい内容は忘れてしまったが、今年も後輩たちは、県大会・北信越大会・全国大会などで活躍した模様。思わず、熱く燃えた自分の現役時代を彷彿とさせたのは私だけだっただろうか。

〈演奏を聞いて…〉

さて、いよいよ第二部津軽三味線。演奏は「高橋竹秀」。本名は小林史佳（ふみよし）君、上にも書いたように101回卒業のわが同窓。お母様も三味線を修養していた関係で、小さいころから修行を積んでいたという。現役時代はバスケット部で活躍したという彼は、後で並んでみたら私よりずっと背が高い。日本的な三味線に現代的な好男子、ちょっと対照的な取り合わせが意外な印象を受ける。今回の演奏は、実は七月の新潟での青山同窓会総会がきっかけだそうだ。その音色を会場で聞き感銘した栗林会長が、この東京でも皆に聞かせたいとのことで今回のご披露となった。初めて三味線の生演奏を聞く私にとっては、確かに胸の奥に響き渡る音色、心の奥深くで何かが突き起こされているような衝動を感じる。用意してきたCDもあっという間に売り切れたというから、演奏を聞いて何かを感じたのは私だけでないのだろう。計三曲の味わい深い時間を過ごす。

〈懇親会の主役は…〉

第三部はお待ちかね懇親会。「創立一一〇周年記念式典」のビデオがバックで流される。記念式典のみならず、いつの時代の映像なのか、青陵祭やラグビーの試合様子など母校の歴史を物語る

映像が刻まれている。

さらに今回の懇親会を盛り上げたのが、今春卒業したばかりのフレッシュな110回卒業生。ただでさえ百余名の参加者を集め活気溢れる中、110回生は一大勢力となる多数の参加者を得、応援歌合唱では壇上を占領し、溢れる若さを惜しげなく出席者一同に分け与える。

と、もうすでにお別れの時間となってしまった。全くあっという間である。これで別れるのも惜しいと、それぞれに話をつけて二次会へと足を運ぶ出席者も多数。私は、来年のアトラクションはどんなものだろうかと今から期待を膨らませて帰路に着いた。

四六期　恒例の集い
～白髪と薄髪～

横山　隆二（46回）

昭和十四年卒の我が期は最新の名簿によると逝去と不明とあわせて一四九名、現存は八五名である。

又同窓会費納入者は四十数名、記念募金目標も達成しているが、総会の出席が数名と漸減しているのは、八〇才超の年からしてやむをえないか。かくいう私も茲二年欠席である。

今年の同期会の出席は二十名。例年より六―七名少なかったが、東京から五名も来てくれた。その諸君には例年の通り新潟銘酒を進呈した。

今年の総会はいつもと違っていろいろ新しい話題があった。

一つは十一月の市長選で、同窓七五期卒の篠田　昭氏を同窓会有志で応援しているので投票を、という文書を鍵富幹事より披露。（同氏は見事当選）

次はこれも恒例の十回出席賞が馬場吉衛君に贈られたが、同君は横田めぐみさんが在校時の校長で、長年にわたって救出活動に尽力してこられた。最近は会合、行事、マスコミ対応等で寸暇もない中を出席して挨拶をされたが、その頭髪は眞白で長年の労苦を偲ばせるものであった。

我が期の論客、富所強哉君は在学中、その厳しさで今も語りつがれる軍事訓練の「シヤモ」教官のお宅に下宿をしていたことがいつも話題になるが、同窓会報紙上でも校歌応援歌の文言についてとか、全校弥彦行軍の記事等々で相変わらず健在ぶりを発揮しておられる。今回もそれについての解説が行われた。

このように例年よりも話題の多いスタートであったが、乾杯の後はいつもの通り二時間にわたって歓談が続き、校歌を斉唱して散会した。

当日出席予定で欠席した中田紳一郎君がその数日後に急逝され、水原町の酒蔵、塚野敏雄君も既に亡くなって居られる由。

掲載の写真で見られるようにいかに白髪であろうと薄髪であろうとも、出席できるうちが幸せというべき年代になったものと泌泌思う次第である。

なお例年発行している近況集ですが、今回は私が勉強している「地球人類つれづれの旅」の冊子作成の為に怠ったことをお詫びします。

お詫びと訂正

富所　強哉氏（46回）より次のような訂正のはがきが届きましたので、ご報告いたします。

皆様には日頃会務に御尽瘁頂き有り難うございます。

早速ながら会報七五号に掲載頂いた拙稿に関連してお詫びとお願いがあります。「百年史年表にある昭和十二年十一月の弥彦神社参拝について記憶がない」旨を拙稿で記したことにつきまして、四十五回卒の綿井兵衛先輩から「同行事が存在した」とのお電話と、追って同先輩の卒業アルバムの写真の複写を頂き、その写真に「行程十里」とあることで私の失念であることが極めて明らかになりました。

会報七十四号で弥彦神社が白山神社と報じられたことを私が重大と考えましたように、十二年の弥彦神社参拝に疑念を抱くかのような拙稿の記述は当時の在校生にとって重大なことと思考いたしますので、次号にでも何等かの訂正記事を載せて頂くのが宜しいかとお願い致します。

なお綿井先輩からのご指摘はその前の四十五回生の集まりでの話題が契機だったとのことを申し添えます。

私の忘失からご迷惑をおかけすることをお詫びし、善処の程を重ねてお願いします。

末筆ながら皆様のご健康をお祈り申し上げます。

不一

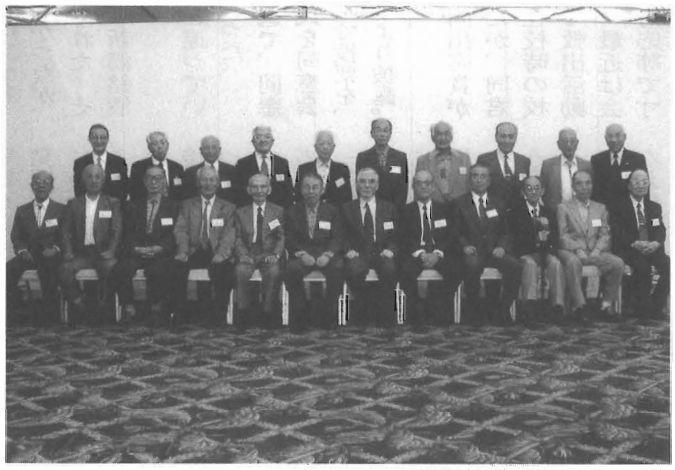
（四十六回生　富所　強哉）

平成十四年度48期会例会

代表幹事　五十嵐　晧太（48回）

表記の例会は平成十四年十月十九日十二時三十分から新潟ワシントンホテルにて開催された。出席者は当日になって三名が欠席し二十二名となり昨年より五名減った。その中で遠い北海道札幌から東城次郎君が駆けつけてくれたほか、横浜から小池清泰君と本間五夫君の常連二名も参加してくれて誠に嬉しかった。司会は例年通り南緑八郎君がつとめ、彼の流暢な開会の挨拶で始まった。その南君がこの一ヵ月後の十一月二十二日に急逝されたとは実に驚愕の限りで、あらためて哀悼の意を捧げたい。続いて五十嵐代表幹事からの経過報告。特に卒業六十周年を記念して、学校の中庭に植樹した月桂樹と、五十周年の記

念樹ハナミズキが枯れたので、新たに植え替えたハナミズキの贈呈式を本年三月二十三日に行ったこと（青山同窓会会報本年七月発行）が報告された。その後この一年間に亡くなった高木義雄、関口太郎、淡路和雄の三君を含めこれまでに死去された多くの物故者に対し黙祷を捧げた。ところがこの例会の当日、戸川喜代一君が亡くなったことが翌日知らされたのだ。今年はなんと悲劇が重なるものかと残念でならない。次に大谷一男君から会計報告があり、その後全員で記念写真を撮り懇親会に移った。まず札幌から来た東城君の音頭で乾杯。そして全員が一人一分の近況報告で笑いが起こり始め、楽しい雰囲気が広がって、次第に盛り上がり懇親を深めた。やがて限られた時間も迫り、最後に蒲原宏君の元気の良い発声で万歳三唱して閉会となり、来年も元気で又会おうと約して散会した。



近況報告と型どおり進み、古川君の万歳で締めましたが、親から頂戴した身体髪膚、満足に機能しているものは少ないながら、猛者ぶり、秀才ぶりはちゃんと残っていて胸颯爽の二時間余りでした。

なおこの会の直後の十一月二日、竹本吉夫君が亡くなりました。秋田赤十字病院を近代的大病院に築き上げ、医療関係の短期大学設立を推進し、「介護問題に最後の情熱を燃やしている」と近況報告をしてくれたばかりのことでした。

（幹事＝池田信彦、逢坂卓男、上村光司、長谷川健作　文責上村）

五十回生同期会

上村　光司（50回）

「同期の大方は今年喜寿に当たります。来年で卒業六十周年、彼岸に移った諸君も八十余名となりました。幸い此岸に居るわれ等、一夕相集い久潤を叙そうではありませんか」

――というわけで、五十回生は久しぶりに同期会を開きました。

十月十九日（土）新潟市川岸町のメルパルク。案内を出したときは、三十人ぐらい集まってくれるかと思っていたのが、尻上がりに増えて四十八人。当初予定していた部屋では収まらず、上階の結婚披露宴用のところに切り替えてもらう始末。百十周年記念の同窓会名簿発刊のための調査で、これまで住所空欄であった諸君数名にも案内できることになって「卒業以来初めて同期会の案内をもらった」といわれては身の縮む思いでした。

秋田県の男鹿市から古川聡君が六十年ぶりの初参加。札幌から五十嵐清君、仙台から広川実君、東京から瀬谷誠君、時田勇司君、伊藤允一君、西村明忠君が来てくれました。初参加予定のもう一人、成田重夫君（兵庫県明石市）は直前になってご夫人の健康上の都合で次回に譲られました。

物故者への黙祷、最遠路の五十嵐清君の乾杯発声、各自の

六十二期 四十八周年同期会

田村　誠一（62回）

卒業三十周年記念から始まって五回目の同期会になる。

半端な周年開催だが、高齢者の仲間入りをしたわれわれにとって、開催間隔の短縮は自然な成り行きであった。

二年後の五十周年記念の会には、今回の出席者八十二名（内県外三十名）全員が出席すると意気込んでいる。

好天の十月十二日、会場メルパルクに阿部正、藤田久喜、松浪清、小黒英作の四先生をお迎えして、星野陸男君の司会で五時半開会。

物故された、恩師と三十九名の同期の諸兄姉に黙祷をささげ、皆川重君指揮の新旧校歌斉唱に続いて、遠藤亮代表幹事の再会の喜びを込めた挨拶、次いで、四先生からそれぞれユニークで含蓄溢れるお言葉を頂戴して乾杯となった。

発声は遠路神戸から駆け付けた大谷巌君。初参加の同君は二年終了の春、芦屋高校に転校していった人だが、新潟高校は、私の母校であると思い出を語った挨拶は一瞬のうちに青春の日を蘇らせた。

宴は賑やかに和やかに進み、憂き世のつらさを誰もが忘れているようであった。恩師もおよろこびのご様子で話しが弾んでおられた。

七時四十分、「丈夫」の時間になった。各クラスから一名ずつ壇上に上がり曽我健君の総指揮のもと大斉唱となった。

閉会の挨拶は山本真弓さん。二年後再会の強い呼びかけに一同大喝采で応えた。

その後三十九名の諸君がバスで二次会場「なかや」に移動。渡辺冨二雄、斎藤晃生両君の進行、藤原岑子さんの気合のこもった乾杯の挨拶で座は一段と盛り上がって宴は九時半まで続き、池田昌之君の挨拶で会を閉じた。

なお、同期会に先だって当日、市内観光バス遊覧を行った。プランナーは平原康男、星野陸男両君。

コースは新潟高校―関屋分水―海浜公園―どっぺり坂―柾谷

小路―柳都大橋―みなとトンネル―信濃川左岸道路―千歳大橋―ビッグスワン―メルパルク。

三十三名が参加した。ビッグスワンでは貴賓席までも所長から案内してもらって大好評であった。

翌十二日は二十八名が参加してゴルフコンペが行われた。

初めてのクラス会（64回・3F）

高木　睦弘（64回）

平成十四年八月十五日、卒業以来初めてのクラス会がイタリヤ軒で開催された。驚くなかれ約半世紀振りである。卒業時五十名であったが亡くなった方が四名、住所不明の方が四名で、四十二名が現有勢力である。その中で今回参加した方が二十三名だから、かなり出席率は高いといえるだろう。

入学した翌年（昭29）に学校がほぼ全焼し、プレハブ校舎や体育館の間仕切り教室という恵まれない環境で、しかも二部授業の五日制という変則授業を受けたものだから大学入試を突破するのがやっとという余裕のなさが、ここまでクラス会が開かれなかった原因であろう。

それでも我がクラスは旧工作室（第一棟の対面　トイメン）という離れ小島で自由を満喫（例えばカストリ雑誌の回覧）したり、青陵祭では応援と仮装（今の連合創造）の二部門で優勝するなど、ある面ではなはだ特異な才能の持ち主が多かったりしたのである。

クラス担任の先生も変則的であった。三年の一学期は故大黒山平先生だったが、何故か二学期からは阿部正先生に変更されたのである。（山平先生の転勤のため）今回米寿を迎えられた阿部先生をクラス会にお招きしたのだが、先生は相変わらず自転車を駆ってご活躍である。（尤も今は電動自転車だそうである）六十五才の我々とほとんど変らぬかくしゃくぶりで、びっくりする。今回の試みには先生も大変お喜びになられ、会の終わりまでおつきあい頂いたのである。

会は一応挨拶やスピーチ等の次第も決まっていたのだが、何しろ久しぶりのことで盛り上がってしまい、予定された「駅伝」「青陵祭」「新潟大火」等についてのスピーチも閉会の挨拶もしないうちに時間が来てしまったことは誠に残念であった。

百十周年同窓会名簿掲載の旧校歌　歌詞に誤り

江口　直禎（56回）

私ども五十六回生は昭和二十三年に旧制新潟中学校を卒業した（半数は新制高校に移行昭和二十四年に1回生として卒業）。しかし、戦後間もなくで卒業アルバムは作成されなかった。

そこで卒業アルバムにかわるものが出来ないかと相談した結果卒業50周年を祝し平成十年記念誌が発行された。卒業時の学級写真、グループ写真、近況報告等と共に新中の校歌も載せた。校歌の歌詞は百周年の同窓会名簿に載っている歌詞をそのまま載せた。ところがその歌詞が昭和十五年改訂前のものと後のものとごちゃ混ぜになっていたのだ。百十周年の名簿にも間違いの校歌をそのまま載せてあった。つまり、百周年の時の校歌を確かめもしないで機械的に載せたということだ。

新潟中学校　校歌
御風作詞の歌詞

(四)
時流はいかに濁るとも
わが校風ぞ彌清く
文にはた武に幾十年
裏日本の覇者として
光輝をかへぬ歴史もて
青陵健児ここにあり

(五)
いざわが友よもろともに
白砂塵なき丘の上
常盤の松の下かげに
誓盟を永久にかためつつ
青陵健児のかんばしき
栄誉をあげむ彌高く

四番を改訂前の歌詞、五番を改訂後の歌詞にしてあった。

旧校歌の拠り所は同窓会名簿である。混乱を来たさないよう気をつけて欲しい。

次に相馬御風の歌詞と昭和十五年文部省校歌認定後の歌詞を掲げる。

（一～三番は変更ないため省略）

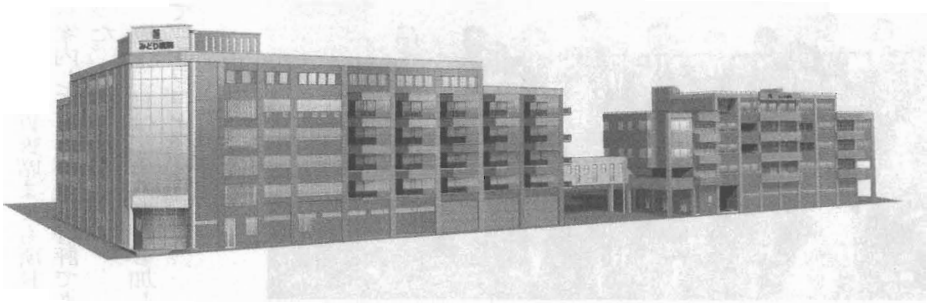
昭和十五年改訂後の歌詞

(四)
時流はいかに濁るとも
わが校風は彌清く
文にはた武に幾十年
裏日本に名を挙げて
光輝に充てる歴史こそ
青陵健児の誇なれ

(五)
いざわが友よもろともに
眞白き砂の丘の上
常盤の松の下かげの
誓盟を永久にかためつつ
青陵健児のかんばしき
栄誉をあげむ彌高く

障害とともに生きる

岩原　朋子（93回）



この度紫鳥線沿いに新しく出来た総合リハビリテーションセンターみどり病院に渡邊毅さん（85回）を訪ねました。渡邊さんは隣接するみどりエスポワール病院（老人性痴呆疾患専門病院）と緑樹苑（介護老人保健施設）との三施設からなる医療法人新成会の理事長をされています。こんなに大きな病院の理事長をされているとは思えないほど若々しく気さくな感じの渡邊さんにメイン施設である県内最大のリハビリテーションフロアを案内していただきました。広いフロアには理学療法と言われる運動によるリハビリの器具が並んでいて、別の一角には作業療法といわれる生活にかかわる動作（お風呂やベッド周りなど）を練習する場所になっていました。

現代は医療が発達した事により、寿命そのものは伸びたけれども、健康寿命と一致しておらず、むしろ障害者は増加しているのだそうです。病気や事故・加齢により、障害を負ってしまった場合、障害を受け入れてより良い生活を送るためにはリハビリが必要です。医療だけではなく保健・福祉の複合体であることがここの病院の基本理念なのだそうです。渡邊さんは以前、文教病院で一旦寝たきりになってしまったお年寄りが再び立ち上がるのはとても難しいことや、痴呆が進んでしまい意思の疎通を図れなくなってしまったお年寄りを抱える家族と多く接するうちに、「寝たきりになる前に」「完全に意思の疎通が図れなくなる前に」現状維持または再生を目指すこのような施設を作られました。開設にあたり、各界の青山同窓生の力も大いに借りたのだそうです。これからも、医療の現場においては様々な課題が残されているのでしょうがいつまでも理想を持ち続け、青山同窓生の代表の一人として新潟の超高齢化社会を支え続けて頂きたいと、久々に真面目なことを考えさせられた一日でした。

（ホームページ　http://www.midori-gr.jp）

青山体友会の集い

中川　弘（58回）

芸術の秋、スポーツの秋、去る十月十二日、第十六回青山体友会が開かれた。かつて新潟中学、新潟高校体操部ＯＢの面々の、懐かしい顔ぶれが一同に会し、〇十年前の体操部に、思いを起こす。出席者三十八回卒から九十四回卒まで、その差約六十年。父と子、孫の関係と言えるのは、クラブ活動のなせるわざか。第一回のオリンピック大会から体操は、正式種目として採用され、一九三〇年に日本体操協会が設立されているが、新潟の体操は我が新潟中学より始まったといっても過言ではない。お互いに年こそとったが、過去の若かりし頃の面影が、かしこに残り酔うほどに、なごやかに親睦は進行する。今、母校には体操部はなく、まことに寂しいかぎりだが、進学校、器具の購入、指導者の不足、ジュニア選手の他校への誘導等のためか、いづれの日にか体操部復活を夢見て青山体友会は、応援を惜しまない。体友会も復活十六回と続き、まことに喜ばしい。いつまでも継続したいものである。鉄棒の車輪、平行棒のツエスト、吊り輪の倒立、鞍馬の旋回、跳馬の転回、床運動の前転、よくも、あんなことが出来たものと振返ると思う。体操を愛し、体操によって、いろいろ学ばせられた、なつかしき体操部。来年の再会を期し、久しぶりにかつての校歌、玲瓏の天を合唱し、胸あつくなり散会した。

当日の出席者　近藤　圓（38回）中山　仁（45回）外山芳夫（49回）板谷啓司（51回）土田卯八郎（51回）斎藤　兌（52回）渋谷興司（53回）中川弘（58回）白根　忠（59回）横山明裕（82回）出口卓哉（94回）の11名であった。

ボート部58回卒 OB同期会の報告

加藤　高弘

「われは湖の子さすらいの…」この「琵琶湖周航の歌」は、大正六年、旧制第三高校のボート部が琵琶湖を周航した際、クルーの小口太郎が西岸の今津町で作詞し、当時学生の間で歌われていた「ひつじぐさ」の曲にのせて歌ったのが始まりとされ、その作曲者は新津市出身の吉田千秋であることが平成五年になって判明した。

58回卒は、今年（平成十四年）七十才になった。一回集まろうと言うことになった。我々が旧制新潟中学校へ入学したのは大戦末期の昭和十九年、入部したのは、加藤高弘、堀田利雄、堤俊男の三人、二学期になって藤村洋が疎開して来て入った。翌年敗戦、アメリカ軍の命令で部活動を停められた柔道部などから五十嵐治、植村末哉、行田宏、内山準之助が入ってきた。入替わりで堤は佐賀へ転校して行った。

神戸に住む藤村が前述の今津町が周航の歌の発祥地として、町おこしのため、資料館を作り石碑を建て、三高が周航に使い、我々もそれを漕いだが、今は競艇には全く使われていないフィックス（固定席艇）まで作ってしまい、これを無償で使わせてくれる、という情報を伝えてきた。

大阪に住む内山が早速今津町へ出向き、平成十四年十月二十七日、日曜日であるが、作曲者の地元からのオールドオアズマンの来訪を歓迎し、艇の使用を許可するとの約束を取り付けて呉れた。

かくして、前日二十六日、横浜、横須賀から植村、堤が、新潟から残りの四人、計八人が、今津町の対岸の長浜に集合、懐古談に花を咲かせて一泊。翌朝は快晴なれど波高い湖を先ず竹生島へ遊覧船で渡る。ところが波が高くて島へ接岸できず長浜へ引返し、やや大きな船に乗り換えた。この間一時間をロス。竹生島見物後、今津町へ渡る。何が幸いするか分からない。この時間ロスで、波が凪いだ。とても艇は出せまいとあきらめていたのだが。もう一つの難問。雨が少なく湖の水位が下がっていて艇庫から出した艇を僅かの距離だが持ち上げなければならない。漕ぎたい一心でここまで来たお爺さん八人は、力を合わせて、艇を湖へ浮かべてしまった。誰にいわれるでもなく、昔のシートである舳手植村、2番加藤、3番堤、4番行田、5番五十嵐、整調藤村、舵手堀田、選手監督内山と納まる。約三十分間湖上を回った。五十三年前の感覚が蘇る。体は覚えていた。オールもぴったり合ってスムーズに進む。余りにもうまく漕げて全員が自分自身に驚き、これぞ青春の日の歓びの再現、と感動した。

日曜日にも拘らず立会って頂いた町の職員にお礼を申し上げ今津町を辞し、京都駅で解散した。

初めての試みであったが、全員参加で全員が満足し、年を忘れ、互いの健康に感謝し合った集まりであった。

山岳部 OB会開催

一月三日、恒例の山岳部のOB会が、新潟駅前の「庄屋」で開催された。参加者は顧問であった飯塚良彦先生はじめ、OB会長の石田瑞穂、以下関西勤務で正月帰省の加藤清策、同じく東京からの榊野、塚野、新潟在住の馬場、玉野、中村、阿部、湯田の諸氏十名であった。乾杯のあと、久しぶりの顔合わせの人も多く、近況やら、今年の抱負など、注ぎつ注がれつ語り合ううちに銚子も進む。今年は山岳部が新制になって新しく発足してから五十周年となるので、その記念行事などについても話は弾んだ。これから若手を中心に、具体的な諸行事を計画して行くこととなった。山岳部は、それぞれ在学中の顧問教師のもとで結束が堅いので、顧問を通じて、OB諸氏の消息、名簿の整理、近況把握などを、早急に進めることとなった。又出席者それぞれの在学中の思い出などは、なつかしく、またつい昨日のことのように思われた。最近の健康管理、孫のことなどの話はそれぞれの歳を感じさせるものでもあった。

第十四回青山OB会ゴルフコンペ

吉田　徳治（83回）
渡辺　毅（85回）

去る十一月二十四日、恒例のゴルフコンペを紫雲ゴルフ倶楽部・飯豊コースで開催しました。十一月に入って寒い日が続いていたにもかかわらず、当日は快晴で絶好のゴルフ日和となりました。

優勝は関根紀一郎さん（68回）で、グロス78・ネット69・6というハイスコアで堂々でのべスグロ優勝となりました。好評の期対抗団体戦は72期（北村誠作、白井秀昭、津野秋彦、渡辺国夫の各氏）が優勝されました。

今回は「長谷川市長の慰労を兼ねまして」という趣旨で参加を募りましたところ、寒い時期にもかかわらず四十四名という予想外に大勢の方々の申し込みを頂きました。更に表彰式には、コンペに参加できなかった方々もご来場され、六十人近い盛会となりました。

表彰式では、上村光司会長（50回）のご挨拶に続き、小林享副会長（60回）の音頭で乾杯を行いました。その後長谷川義明前市長（61回）、篠田昭市長（75回）吉田六左エ門衆院議員（66回）が次々とご挨拶され、会場は大変な盛り上がりを見せました。更にBSNラジオのレポーターとして活躍されている間嶋めぐさん（101回）が駆けつけてくれまして、長谷川前市長への花束贈呈をしてくれました。

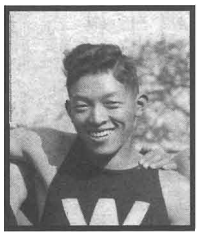
今回特筆すべきは、94回卒の佐藤孝幸君が参加してくれたことです。我々より若い世代にも、当会が確実に浸透しつつあることは大変喜ばしい限りです。

今回から幹事を拝命し、いろいろ行き届かないところがあったにもかかわらず、皆様からねぎらいの言葉を頂き、幹事冥利に尽きる思いです。また先輩諸氏から、百人くらいの大コンペにしようというご意見も頂戴しました。春のコンペは、五月十八日（日）に行う予定です。ぜひ皆様方の参加をお待ちしております。問い合わせは吉田徳治まで。

電話〇二五・二八二・五一五一
（第一電設工業（株）内）

名スプリンター北村太市・大先輩逝く

柴田　実（61回）



早稲田時代の北村太一さん

青山同窓生の長老の一人で新潟日報社社友・元取締役・新潟日報販売（株）初代社長の北村太市さんが平成十四年十二月四日に永眠された。大正十一年卒の二十九回生で満九十七歳。最新の「同窓会名簿」によれば、同期生八十八人のうち住所、氏名、電話番号が掲載されているのは北村さんだけ。死亡確認六十二人、氏名のみで消息不明が二十五人とある。

北村さんは「県民の新聞」を標榜し、発行部数五十万部を誇る今日の新潟日報を築いた功労者として知られているが、新潟県の陸上競技界を支え、人材育成や競技施設の整備に尽力されたことはあまり知られていない。

新潟中学から早稲田大学に進まれた北村さんは、恵まれた体格、優れた運動能力、とりわけ素晴らしい走力を見いだされ、中・短距離のスプリンターとして早大競走部の名声を高めた。当時の極東選手権大会（現在のアジア大会）に日本代表となった早大リレーメンバーの一員として優勝を飾っている。

昭和三年に帰郷し、新潟新聞に勤務するかたわら「中等学校リレーカーニバル」を起こし、自らスターターを務め、当時の常盤、青山、葦原のクラブ員を集めた「新潟アスレチッククラブ」を結成した。同六年には早稲田対新潟県対抗陸上競技会を誘致し、後輩のオリンピック選手・織田幹男、南部忠平らと新潟師範の大杉喜秀監督、島掛藤次郎主将らが一戦を交える場を作り出した。

新潟市白山総合運動場の建設や新潟市体育協会などの結成にも参画し、体育の振興に大きな足跡を残された。中国から引き揚げられた戦後も、後輩を温かく見守る北村さんの姿がよく見受けられ、昭和四十六年には新潟市から「スポーツ振興賞」、同四十九年には日本陸上競技連盟から「秩父宮賞」が贈られた。

まさにスポーツ振興の道を堂々とあゆんだ大先輩に相応しい法名「釋太進」に合掌。

ハイティーン水泳新中・新高 36

平田　大六（60回）

62 マージャンパイ作り

途方もないことというのは、マージャンのパイを自作しようということだ。これについては、作品の写真入りで本に書かせてもらったことがある。（註）

パイは高価で、高校生では買うことが出来なかった。仲間が持っていたのは、家つきの道具で、親たちにかくれて持ち出していたのだ。

その途方もないことを、高校二年二学期の冬休みにやることにした。

関川村へ帰省し、近所の仲間…みんな年下の仲間を集めて、構想を打ち明けた。作業は分業体制でやった。枯れた大竹の材料をまず割る。それをノコギリで棒ネギを切るようにプツンプツンと切ってゆく。白パイがたくさんできる。パイの内面に模様を彫る。文字と「索」は彫刻刀で、「筒」は三本錐を使った。半日ほどで出来てしまった。

遊び方は、私が仲間に伝授して、その日の夜から、これを使って熱心にやることができた。冬休みはこれでめいっぱい遊んだのだ。

作った道具に不満が残った。①竹材をノコギリで切っただけだから、いじっていると掌が痛い。②寸法がそろわないので、二段に積むと上下で合わない。③手でさわってもわからない。工期が短く、工程管理がゆきと

どかない分業…下請け仕事の、弊がモロにあらわれたのであった。

63　教室で2号機製作

2号機を製作しよう。

今度は作るのではなく「製作」だ。

冬休みが終わるころに、私は近所から大きい青竹をもらって、これをパイ一個分毎の素材に切り分けた。ここまでは前回と同じだ。この素材を袋に入れて、揚々として私は、三学期のはじまる新潟へもどってきたのだ。

規格を統一するにはゲージが必要だ。私は定期入れのセルロイドに大小二つの四角穴をあけた。差は0.5ミリ程度。素材の竹を、大きな穴をくぐり、小さな穴に通らないまで整形する。角はおとして全体にサンドペーパーをかける。

素材から規格品までの作業を、私は三学期の教室でやったのだ。クラス仲間には早い時期からバレていたので事情通もいるわけである。教室の机の下はいつも竹クズでちらかっていたので、一度だけ先生にたしなめられたことがあった。どうしても授業中になってしまうので日産は数個どまりだった。一ヶ月ほどで立派な「規格品」の白パイ百三十六個が完成した。

模様彫り。

指でさわってもわかるように、これが基準である。彫りを深くして統一しなければならない。斎藤邦夫、阿部宏一、松井幸彦（いずれも60回）など仲間の「所有物」をしげしげと観察した。赤、黒、緑の三色が使い分けられている。彫りは集中力が必要なので、帰ってからの深夜にやった。

薄くそいだ竹で点棒をつくった。

やったあ！

見ごとな出来だ！

「一索」の面には「DAIROKU・1951」と製作者名も刻んだ。

しかし。

一号機の時よりも、遊んでいてそんなに夢中になれなかった。ユーザーではなくメーカーとしての楽しさのほうが大きかったのだ。

それにもひとつ。

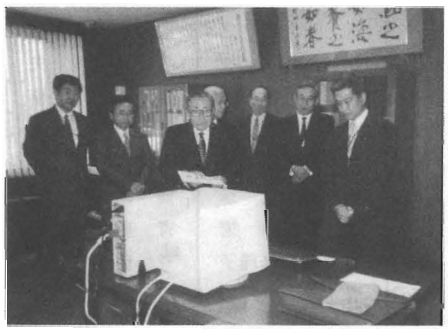
こっちのほうが重大なのだが。こんなことしてたら来年の受験はどうなる。もっと重要な事は、大黒善弥監督（50回）との約束だ。やがて始まる今シーズン、私は勝てるのか。

（つづく）

（註）青山60回生MUZO会「青山夢像館」（一九九三）五五四

「百十年青山同窓会名簿」完成
―第一印刷さんより名簿二百冊寄贈―

創立百十周年記念事業の最後の一環として、「百十年青山同窓会名簿」が平成十四年十月に完成、出版された。これは、独立した事業として株式会社第一印刷所さんに手がけてもらっていたもので、第一回調査から出版にいたるまでの全ての仕事をおまかせした。（各学年の名簿確認を学年幹事に頼むなど、一部の協力はお願いしている。）ついては、その完成に際して第一印刷さんから名簿等の贈呈の申し出があり、十月九日（水）新潟高校校長室において掘一第一印刷所代表取締役から上村光司青山同窓会会長へ贈呈式が行われた。



贈呈品目録

一、青山同窓会名簿　二百冊

一、平成十四年分各期幹事用期別毎プルーフリスト　一式

一、会員名簿管理システム　一式

以上

最後の管理システム一式というのは、名簿全体を内蔵した本体を含む、パソコン一式のことである。

なお、名簿頒布については、会員への予約頒布は完了しているが、当面第一印刷さんで同窓生に限り申し込みを受け付けている。問い合わせは左記の電話番号へ。同窓会事務局では扱っていないので注意されたい。

電話〇二五―二八三―三七八五（第一印刷株式会社　青山同窓会名簿用）

平成13年度青山同窓会収支決算書
（自平成13年4月1日～至平成15年3月31日）

収入の部　（円）

科目	予算額	収入額
繰越金	3,656,000	3,656,709
入学金	1,040,000	996,800
会費	5,500,000	6,517,500
雑収入	1,000	578
合計	10,197,000	11,171,587

収入の部　（円）

科目	予算額	支出額
人件費	1,250,000	1,406,220
通信費	2,000,000	1,874,493
印刷代	600,000	477,046
慶弔費	150,000	87,000
会報印刷代	1,000,000	1,031,877
会議費	1,600,000	1,205,648
卒業生記念品代	300,000	259,350
補助費	1,300,000	1,181,680
退職積立金	100,000	100,000
諸費	260,000	296,583
予備費	1,637,000	634,340
合計	10,197,000	8,554,237

収支差引残高　2,617,350円
次年度繰越金額　2,617,350円

平成14年4月23日
上記の通り相違ないことを確認いたします。
監事　早福　卓
監事　上杉　雅之

平成14年度青山同窓会収支予算書（案）
（平成14年4月1日～至平成15年3月31日）

収入の部　（円）

科目	本年度予算額	前年度予算額
繰越金	2,617,000	3,656,000
入学金	860,000	1,040,000
会費	5,300,000	5,500,000
雑収入	1,000	1,000
合計	8,778,000	10,197,000

収入の部　（円）

科目	本年度予算額	前年度予算額
人件費	1,250,000	1,250,000
通信費	2,000,000	2,000,000
印刷代	600,000	600,000
慶弔費	150,000	150,000
会報印刷代	1,000,000	1,000,000
会議費	1,600,000	1,600,000
卒業生記念品代	300,000	300,000
補助費	1,300,000	1,300,000
退職積立金	100,000	100,000
諸費	260,000	260,000
予備費	218,000	1,637,000
合計	8,778,000	10,197,000

吉田弓子
渡辺茂
和田美津子

79回　S46年

浅井敬一
青山義明
五十嵐康之
石井隆
石井智裕
石田晋
伊藤毅
井上隆二
今井誠
今井幹文
猪股裕紀洋
植木一弥
植木秀任
薄田数雄
枝並和男
江花和郎
大野俊治
岡島初
小原正男
勝山昇
河正子
川合千尋
神林恒道
川上康夫
川島邦夫
神戸和彦
北原宏一
木村泰博
桑原直樹
倉田由美
小泉仲之
小林潤一
高坂浩子
河野雅子
斉藤君子
佐々木隆輔
笹川富士雄
佐藤富士夫
佐藤和明
佐藤晃一
佐藤隆
佐藤たつ子
佐藤玲子
庄司義興
渋谷昇
白井行雄
新保博史
杉原正道
鈴木正昭
薗部千恵子
田阪憲昭
高橋由和
玉井美穂
田中隆
土田進
内藤真一
野島常雄
野村正史
長谷川宏昭
林睦
藤巻則夫
藤井大三郎
藤原明
保苅俊治
前田和夫
丸潟孝
村井圭子
山崎玲子
横川憲司
横山由美子
吉澤佳一
吉田至夫
吉谷徳夫

80回　S47年

池淳一
伊藤明
岩波聡
岩橋浩司
植木邦彦
太田啓子
小片守
小野秀子
神原誠
上村諭
菊池隆宣
櫛谷文隆
小池雅彦
小林亮介
坂上富士男
鈴木亨
鈴木紀子
高橋直人
高橋麗子
多田毅
棚橋忠
田巻明恒
玉木友二
玉木一彦
津野正裕
中山真
羽鳥敬彦
本間慶一
本間政子
桝山康二
山井健介
山崎元義

81回　S48年

相場剛
朝井豊
荒川洋
五十嵐公
伊藤武志
小野島正彰
片桐裕則
久須美浩二
桑原隆
斉藤直
坂井浩
坂田光子
佐藤弥生
沢口昭一
白石義人
鈴木薫
砂田徹也
清野満
高木実
高橋了子
武田正之
竹石尚史
田尻美砂子
田近久志
張高明
富井信喜
中野恭子
長北敏弥
成沢林太郎
野口良子
平田栄子
広岡明美
藤村修
本間寿晴
本間桂子
前川徹
松崎美郎
村山裕
山田徹
鷲沢直也
渡辺真
鰐淵博

82回　S49年

青木定夫
荒井誠
荒川育子
池田勝久
稲井晶子
稲川純
上ノ山徹
大塚英明
風間隆
唐沢佳子
日下部朋子
栗原道平
幸村克喜
小林しおり
小林立彦
駒井早苗
小針隆
小亦斉
坂上極
澤田俊明
高橋英明
津野吉裕
戸田史郎
中林昭裕
成田昌稔
野崎秀明
生野隆史
広川恵子
福田勝之
麩沢祐一
本田明彦
本間聡
真谷誠祐
宮島一敏
目黒茂樹
山我義則
八藤後茂樹
山本剛史
吉田実
渡辺宣昭
渡辺健一

83回　S50年

浅間芳朗
五十嵐謙一
五十嵐杉義
植木秀功
牛木宏子
遠藤光郎
岡田潔
風間磨理子
荻荘則幸
奥田美佐都
加藤稔
河原貢司
木村豊
窪田久
熊木みや子
佐藤悌二郎
鈴木時男
高橋克人
高橋慶子
高山佳郎
玉木槙一
中村昌子
長沢恵衣子
仁多見俊夫
Dougan 知子
原錬太郎
藤崎直美
藤田祐子
古川靖
本間憲之
松本和彦
水原章貫
宮野由貴子
村尾弘子
森平淳子
山口虎彦
山作房彦
横山修
吉田桂
吉水敦
若杉忍
渡辺友昭

84回　S51年

飯塚雅士
五十嵐英一
石崎悦郎
今井康晴
大須賀郷子
岡田憲明
小黒仁
加藤雅一
黒川香
桑原隆男
小林和幸
小林正史
近藤公男
郷秀人
郷扶二子
斉藤敬子
斉藤忠志
鈴木紀夫
高橋裕之
田崎和之
畠野達郎
平野明
丸山正行
丸山祐一郎
森岡哲夫
宮崎清也
行田充
芳川敦子

85回　S52年

雨木若慶
石田富美子
大沼文男
大野茂
奥村基
笠原徹
川村和忠
桑原敦志
佐藤隆司
白井晃
須田昌司
高須洋子
高橋覚
竹内一彦
筒井敦子
戸枝秋夫
灰野孝宏
長谷川亮子
星山松太郎
宮腰寛
宮村一明
村山卓
脇野裕子
渡辺毅

86回　S53年

阿部二郎
阿保聖子
五十嵐実
石川健一
伊藤健一
稲月原
稲田秀一
加賀田豊
鈴木正孝
瀬谷信一郎
高橋俊吾
高橋雅利
高橋賢
高橋聡子
高野晃
高松哲也
田中照夫
王木正己
坪野俊広
外山真治
中川佳代子
宮腰重三郎
吉崎芳明
渡辺昭夫
渡辺彩子

87回　S54年

阿部崇
荒川一成
五十嵐昌子
石川裕之
井上智
今西博一
大久保総一郎
大森克利
奥村克彦
小野和宏
加藤真理子
清水忠明
白柏基宏
鈴木秀利
Saltzgaber純子
土屋真規
林恭弘
藤本健介
細川英一
本多剛
松本俊輔
宮田佳則
山田治之

88回　S56年

五十嵐修一
池田全之
石原基規
大家毅
岸亮子
君伸一郎
木村裕毅
草間博子
小竹聡
小湊知見
白井栄一
新保亮
鈴木孝晴
常木郁之輔
内藤順久
南場充
長谷川裕
長谷川健司
藤木一浩
堀内国男
本間候
三木公一
宗村信明
吉田厳
渡辺徳昭
渡辺治夫

89回　S56年

相場恵美子
池信平
石栗健一
市原綾子
今井あかね
加島彰二
倉田裕一
田村雅彦
灰野正宏
渡邊克彦
山上浩志

90回　S57年

五百川浩
池元太郎
石見鉄夫
岩谷淳
神田透
木口量夫
儀同政宏
斉藤恭広
斉藤今日子
白須洋二
田辺文
隅木信利
土屋亨
富山栄子
深川充子
渡辺栄

91回　S58年

市川健
梶谷敬子
金沢誠
本間正隆

92回　S59年

河内康志
北尾彰朗

94回　S61年

花村竜司

95回　S62年

浅岡俊宏

96回　S63年

鈴木周
諫山えりか

98回　H2年

田井洋

99回　H3年

宇田達

101回　H5年

小川和恵

103回　H7年

坂上結希

107回　H11年

宮島望

長井義輝
中島正春
中村宏
西埜孝樹
野沢担
野沢正樹
長谷川守
浜田敏克
広野義隆
本田春雄
本間勝正
松原要一
丸山鉄彦
三沢京子
村山克夫
山内幹雄
山田喜英
山本俊介
若林忠

72回　S39年

赤川洋太郎
阿部雅子
阿部道行
荒井竜二
幾野隆策
石井達夫
泉井亮
伊藤美智子
今井美和子
内山正義
追手巍
大野義彦
落田真一
金子由征
神林賢治
北村誠作
久保田謙弥
黒木トシ子
小松久義
斉藤俊正
佐野正俊
篠原一博
清水陽人
白井秀昭
菅又滋
鈴木毅
鈴木理子
祖父江邦子
高木正雄
戸田満弘
富田由季
中戸義興
成沢栄一
成沢虞美子
丹羽正之
根布秀子
樋浦孟
船岡信雄
古山恒夫
本間政晴
牧野秀樹
松永宏五
松原和子
三国正昭
横堀弘
吉田秀穂
和久井和彦
渡辺一重
渡辺国夫
渡辺玄弥
渡辺毅之
渡部正敏

73回　S40年

阿部達也
阿部裕
井口正男
石田レイ子
上野秀夫
大沢義弘
大塚正夫
奥村繁
小川幹夫
尾口基
小野塚真一
片桐利雄
解良都代子
小山昭彦
斉藤昭治
篠田孝
鈴木淳
関野弘賢
高崎進
高橋昇
田島健三
田中三郎
田村正一
鶴木秀司
中野治
中原和之
南波祐二
西正与
野城真理
樋口正昭
樋熊節子
平川博
堀内徳吉
森敬治
鰐淵勉

74回　S41年

藍沢幹人
相場哲郎
相場文夫
石山范
和泉潤
伊藤宏
稲葉伸雄
薄田祥子
江口則男
大滝均
大森寛
岡村康生
奥寺淳子
尾崎俊彦
風間悦男
風間雄一
金子吉一
金井隆夫
加門文隆
川上耕
河崎順昭
木下真由美
木村正昭
黒木幹雄
小池哲雄
古賀良生
権平弘
坂井靖
笹川秀男
笹川雅之
佐藤俊栄
志田常弘
関憲一郎
相馬憲雄
高木顕
高橋秀憲
竹之内明
田中秀明
塚野憲一
土屋彰義
坪川藤夫
戸枝一明
富樫孝一
富澤慶栄
永井明彦
波多腰明
林睦子
原信一
広神俊彦
広瀬秀
藤田文子
藤田一巳
古川兵衛
本間裕
前田春男
森澤盾
谷内田健次
柳川紘三
横川三男

75回　S42年

青柳豊
阿部秀作
阿部恒久
有園順子
安西徹郎
安藤裕司
石沢政夫
石田彰
伊藤啓司
伊藤隆
伊藤哲夫
岩崎義則
上田茂
上原恒
江口芳春
大井裕
大滝丈司
大塚恵子
大野道子
岡田政文
尾形幸生
押木泉
小柳幹夫
笠井忠
勝又宣夫
加藤勝士
加藤博
川上滋
神田正一
木村洋
小島秀男
小島富美子
小林正美
後藤輝雄
斎藤昭雄
斎藤謙二
斉藤みさ子
坂井克夫
坂井啓二
佐藤邦雄
佐藤啓介
佐野幹雄
佐野康子
澤田俊朗
清水純
白玉謙一
千田克三
曽我正男
高木一宣
高橋明
高橋正
高橋正明
高橋清一
多賀美代蔵
田中壮太郎
田辺英志
田辺静幸
谷澤悦子
谷澤隆邦
玉井正光
玉木廣
塚本修
常山佐世子
長井仁
富山修一
永井博子
野上紀雄
馬場俊博
桧ケ谷正道
樋口秀夫
平岩三雄
廣川均
福田実
藤井春恵
星野雅博
堀一
本間均
槇明
村松泰夫
三富修
南博
宮永進
武藤芳郎
村木洋子
村山謙一
室塚泰二
百都健
山上卓夫
山崎信行
山根英郎
結城隆行
吉田孝一
若佐則雄
渡辺新
渡辺研二
渡辺秀雄
渡邊令子
渡部信子

76回　S43年

相沢初美
相田光治
荒川秀夫
五十嵐博喜
石田芳博
大井戸左紀夫
小田高久
尾張明美
恩田雅和
金子義伸
加野裕資
柄沢信一
川合邦松
川上陽子
北畠彰
北村幸輝
櫛谷さわ子
久住治
熊木徳正
小島隆平
近藤壽邦
後藤徳広
斉藤幸治
斉藤治
斉藤実
坂上三雄
佐田克己
佐野敬文
菅原正廣
鈴木茂夫
鈴木正博
高山豊雄
竹内誠司
竹内正
武田英徳
田代雅春
田代良子
太原まゆみ
棚橋定衛
田村俊作
戸枝哲郎
中俣正美
中山三喜栄
長北学
長沢菊男
名畑哲雄
不二崎順二
細谷洋一
本図雅雄
本間村紀
三浦まゆみ
水間秀一
見田秀晴
箕輪光泰
村山ひろみ
村山裕一
森隆暁
安田充年
山内春夫
湯本雅恵
吉岡俊
鷲尾栄作
渡辺薫
渡辺拡
渡辺力
渡辺雅夫

77回　S44年

石川鋭一
遠藤良二
尾崎邦明
大塚忠雄
風間誠
片山等
加藤輝夫
川崎俊一
神部昭
北村一雄
木村廉平
木村正史
桑原彰子
小池博実
小林悟
斉藤憲
斉藤繁夫
佐藤茂
佐藤寿秀
清水道雄
杉崎真実子
瀬賀孝子
瀬野正英
田代芳太郎
田中裕介
田中悦子
高野孝治
田原隆夫
谷哲夫
中矢明
永井恵一
永井透
西和男
長谷川次郎
波田野節子
日野浦広昭
枡山健一
水野義行
渡部五男

78回　S45年

青木孝一
五十嵐祐司
板井一彦
伊東真知子
岩城文夫
岩城陽子
岩瀬耕一
上田久雄
遠藤和男
大谷宏
小田勇司
小田哲央
金沢宏
金沢泰子
木村和夫
久住民男
久世隆雄
熊木徳次郎
小林和人
小林辰次
小林直毅
佐々木巌
笹川孝子
沢田清
志藤洋子
清水幸栄
清田潔
曽根正
高橋隆
高橋博樹
高橋正泰
滝沢恒世
田村一成
土谷厚
寺尾綾
寺尾英明
中村健一
長谷川まこと
福原等
藤田太子
松田由紀子
水野秀樹
皆川信子
向井美夜子
吉澤哲彦

内田定寛
榎並義允
小川亮一
小木順一郎
乙川正次
風間聡一
加藤勝弘
加藤孝子
加藤靖夫
金子兼三
金子義信
神田征輝
菊地重治郎
木下功
熊谷國男
小泉正俊
小林啓志
小林裕子
合田春美
佐々木紀美子
佐藤文孝
佐藤正孝
里村和彦
塩谷芳彦
下川友也
鈴木興春
鈴木滋弥
鈴木隆
関篤司
高島敬子
高島文治
多賀浩子
竹石健一
田中澄夫
田村元吉
富田俊枝
中村英哉
中谷藤太郎
二宮靖彦
丹羽真彦
野水宏樹
野水雅行
橋本誠
橋本梁
橋本廉平
長谷川精一
半沢弥栄子
平田孝夫
広沢憲隆
福地利明
福山忠利
藤田佐津紀
古沢満
星莞二
堀口正和
本間請子
松沢孝
丸岡央
宮沢一彦
村木健二

矢部直子
山口喜康
山口信
山崎稔
横瀬功
吉田六左ヱ門
渡辺喜光
渡辺操

67回　S33年

赤芝俊也
味方繁夫
阿部尭
阿部智
池隆夫
石井恵子
石浜真
市原昭一
井上一郎
今泉信作
歌代淳夫
大滝正通
大塚明子
大野敏昭
岡崎功
小川宏
小川トモエ
奥村紀男
小沢秀雄
小野勝義
片山忠一
金井邦紀
川崎ヒロ子
川崎昌彦
岸田興治
倉島邦彦
君英夫
桑山哲治
小林晋一
斉藤久美子
佐川八重子
佐々木邦夫
沢田俊一
塩原満
清水雄伍
白井節
菅沼重登
関根昭一
瀬下一三
高倉亨
高野宏一
高橋耿平
高橋三郎
高橋直也
高橋信夫
滝沢元
田中収
田中直史
玉木直子
寺井宏
戸松秀雄

中野仁
永井一穂
西章
橋本秀子
浜田達郎
原敬治
原敏明
一柳肇
広野達彦
福山忠昌
星允
星野真理子
堀川楊
松井啓
松井建吾
松川哲之助
丸山鉄弥
丸山真三男
村山実
山口文夫
山田尚男
横木正幸
吉田一郎
渡辺国平
渡辺脩
渡部透

68回　S35年

赤塚五十二
安達賢司
我孫子晋治
阿部俊明
伊佐早幸男
石黒正子
石橋輝樹
伊藤昌太郎
岩原修爾
岡村光郎
奥村ミイ
小黒モト子
小田公幸
河西厚
片桐靖孝
加藤健一
加藤トモ
上村敦子
上村嶺子
上村晃一
亀沢範正
川崎建治
北村泰作
小島光恵
小林勲
小林正昭
小日向信光
駒林進四郎
近藤和久
近藤義雄
今野公和
斎藤重信
斉藤忠雄

斎藤正果
佐々木賢介
佐藤薫
佐藤敏
佐藤広則
志賀惇
進藤喜代子
鈴木裕徳
鈴木喜也
関隆二
関川利男
関口徹雄
関野紀一郎
関野敏
滝沢猛
竹石爾
田中康一
田中宣男
田中光弥
池主憲夫
塚本孝栄
土田正
寺尾正大
中島輝雄
中村秀子
中山紀代子
西原徹
浜田庄司
原田衛
樋口修吉
広川忠夫
福田良子
藤崎昌彦
藤田伸二
藤田実
古舘信生
星野敬
堀内孝
本田建一
増子藤男
伊澤子
丸山弘
宮尾益征
村山弘
森田浩二
横山清夫
梁取健
吉原正博
渡部治子
渡辺泰彦

69回　S36年

青木利祐
阿部治男
阿部正昭
池田正夫
石川健一
石本隆太郎
今井昭雄
入山哲郎
内山康雄

大谷勝美
大森ゆかり
小川敏子
小黒朋弘
鴨下守孝
鍵富雅雄
笠原弘
加藤滉
金子雅典
木戸恵子
黒井幸一
桑原秀夫
小出紘
小島健二
小林勲
小林昌二
小町聰敏
坂爪征基
佐藤彬
佐藤隆子
佐藤孝靖
篠川旦
清水一男
白川英二郎
城田敬子
菅井幹夫
鈴木将夫
高橋義教
高柳洋夫
田中正人
田宮吉睦
塚原秀規
敦井栄一
寺尾芳樹
栃倉浩
富所忠男
堂垣内亨
中原恭子
中俣達
新田公子
西山勝
野崎武敏
原綾子
樋浦紘一
平野茂樹
平林功三
広瀬淳之
細野義彦
本間譲
水野美智子
山崎高明
山下菊夫
山田達男
山田栄
吉野国夫

70回　S37年

浅川洋一
五十嵐健也
井口禮里
石井幸子

石井鐐二
伊藤善允
猪口孝
今井正昭
岩脇秀迪
江口光夫
大塚哲夫
岡田利邦
小川弘良
小川瑞枝
小沢欣治
笠原大仙
風間秋利
加藤邦紘
加藤清策
金子健三
川田昌人
北村雅英
桑原和雄
小泉和代
小嶋桂吾
小林紀昭
小山正一
近藤東
斎藤忠正
斎藤典子
坂井政行
酒井ゆき子
佐川幹恵
塩原聡
志賀安雄
品田悦孝
清水伴雄
杉本正義
鈴木攻
関根俊明
高尾英明
高野泰宏
高野義樹
高橋道子
滝波祐助
田中信
田中由夫
田辺豊
土田紘一
弦巻洌
出来島精一
戸田礼子
内藤栄樹
中村啓二
中村重樹
内海哲男
新田誠一
西丸功
西田牧衛
能田直子
野川晃一
花輪治
馬場照恵
坂西康英

日江井敦子
平林和郎
平山賢一
藤井朝子
藤井保男
本田正樹
増田勝弥
松原紘
右田洋
水上和雄
水野邦生
三原邦夫
宮下忠雄
村田紀夫
村松信輔
山田セツ
山崎芳彦
山田修
山田祥子
山宮士郎
横山治夫
鷲頭宏二
渡辺麗子
渡辺濱介
渡部担
渡部美那実
渡辺允雄

71回　S38年

相田康夫
阿部尚平
阿部敏弘
五十嵐敦子
井沢幸子
石田武威
石橋達弥
井田征夫
伊藤邦彦
伊藤登
稲葉雅之
今井清治
植木岩根
小沢和子
大竹純夫
大西洋司
小黒俊彦
小田島壽廣
柄沢卓
川上紘平
熊倉哲
小泉淑子
小林碧
近野茂
佐藤彬
佐藤伸郎
佐藤禮子
渋谷良二
高橋あき
高橋クニ
高橋健造
高橋俊彦

鈴木正三
巣山誠之
関根理
高桑暁
滝沢哲也
竹山恒夫
田中宣
田中忠夫
土田常武
富川龍之
中村龍雄
長沼雄峰
鍋谷毅
西沢良地
庭山熙彦
野俣徹
野本昭生
羽賀博
長谷川耕一
長谷川義明
浜口福寿
番場道夫
藤井真夫
藤崎隆三
藤沢敏雄
藤田宏
藤原信雄
古沢善文
本間淑人
丸山通夫
三沢博敬
湊秀平
宮川隆
村田俶
村山健
谷田部信
矢田昌三
山田成吾
横村一郎
和田照子
若林瑞穂
渡辺和義
渡辺皐哉

62回　S29年

青木留蔵
青柳正雄
安食恒昭
五十嵐昭雄
石黒恒
池田昌之
石崎富士臣
石田忠郎
石田寛
石本悦夫
岩田亮司
岩渕真
石見勝子
上原明
内山一雄
内山隆之
漆谷介二
遠藤亮
大高康夫
小黒昌一
貝津徳男
貝沼由紀
加藤美明
角家孝之
神成粛一
木村亮
河野開
小池健治
小島研也
小林政弘
近綾子
近藤琢也
近藤哲郎
斎藤悦成
斎藤健
坂井幸男
佐藤晃一郎
佐藤勝彦
佐藤恰
佐藤誠也
佐藤武司
重野直也
柴田仁
白井幸彦
杉内愛
鈴木哲夫
鈴木徳義
曽我健
高橋健一
田子元
立川国臣
滝沢寿美子
田中昭夫
田中毅
田村貫次朗
田村恭子
田村誠一
寺井卓
遠山晴夫
外山啓
中川洋吉
中島寛
中野義一
中村洋二郎
中村忠彦
中山敏彦
永井梓
西野勲
長谷川舜治
長谷川懐
早川彰
原滋郎
原正雄
平田邦夫
平原康男
広野耕一
福田生一
藤原岑子
藤巻圭介
藤山陽三
帆苅宏典
星野隆夫
堀栄一
堀口忠五
桝山純
町田仁
丸田宥吉
三浦愛三
三国竜彦
三崎成夫
皆川重
水野一
嶺国和
宮沢敏夫
村木修
村木隆
村山悦郎
守口隆夫
山川廣之
山崎敬介
結城俊郎
渡辺順司
渡辺千里
渡辺富二雄
渡辺真
渡邊弘

63回　S30年

間潔
赤羽良樹
穴澤祐哉
荒井正
阿部達
五十嵐信一郎
五十嵐房子
池成行
池治男
石川庄吾
石澤省二
石山芳昭
居城正二
和泉修治
市井吉三郎
市村義雄
伊藤寿介
伊南純雄
今井幸雄
五百川清
薄田聡
江口律子
江口行夫
大阪敏
太田滋
大橋道雄
岡崎勇二
小畑忠夫
会正之
柏正平
梶原哲郎
梶原義郎
加野英資
川崎孝夫
北村壽一
栗田雄三
計良伸正
小島不二
小林光衛
小林俊雄
小林洋一
小林洋子
近藤昌泰
坂上種男
桜井競
佐藤正明
白倉至
杉山弘道
鈴木恒夫
柏墨直彦
相馬潔
大坂伝衛
高木研三
高木章介
高橋朋栄
高橋知義
高橋良行
滝沢一彦
滝沢正元
竹山行三
田中貞夫
千種富生
土田浩平
土屋信之
寺島雅範
戸井田一美
中村瑛
長津栄佐子
西脇重孝
西村允
西名英輔
庭山昌明
間彰
長谷川潤治
長谷川正
羽入義郎
馬場政説
早川勉
平原正男
平野恒夫
藤井尚治
藤井洋
保刈由紀子
本田良二
牧野英二
松井光一
真山俊
松本欣一
三浦喜代次
水落義樹
南満寿子
村田正
村山弘義
山川量
山田恵一
山田豊
山本弘司
湯浅一平
油本暢勇
横田美昭
吉田奎介
渡辺昌夫
山根晴子
渡辺要一郎
和田和男

64回　S31年

青木信道
青野啓
阿部欣司
安藤勝利
石崎海夫
伊藤英一
伊藤勝広
内海公子
江口一弥
大倉孝男
太田健治
大槻修三
小熊甚吉
小田嶋寿一
籠島廣
風間士郎
片桐彰子
柄沢茂
川井文夫
川口徹
川崎明
菊地可寿子
北村市郎
木村坦
熊谷勝
桑野光雄
桑山光文
小出達也
小林脩
駒形裕二
近信雄
斉木幸彦
坂井俊一
坂井敬
佐川清士
佐藤章
佐藤幸治
佐藤唯司
佐藤陽一
柴田史朗
嶋岡洵
清水良男
鈴木喬
鈴木厚生
高橋俊之助
田才邦彦
田代壮治朗
立川實
田中堅一郎
田中恒夫
田辺元彦
谷久
田巻亮
田村康一
千原久人
塚本暉麿
津野慶浩
坪井正康
中谷光隆
中林弘
中村輝久
仲村恒
西野貢司
庭山暢彦
畑野晋也
早川周作
広瀬英治
星晃
星満
星野邦彦
本間義章
真壁日史郎
森田一郎
谷仲久昭
山崎雅司
山根伸之
吉川要輔
吉田豊祐
若槻晃一
渡辺司

65回　S32年

浅田和之
安食悟郎
安宅厚
阿部喜久子
阿部正躬
荒川哲夫
飯野勝栄
池隆史
池田昌彦
石田三郎
泉達尚
伊藤忠明
伊藤不二男
岩野一郎
植木昭彦
梅田和良
大橋修一
大堀隆夫
小栗政夫
尾崎元
小沢征夫
笠原成美
笠巻勝利
風間美彌
加藤純一
金巻啓司郎
河路明夫
神林純夫
木滑孝一
久保田泰雄
小林英輔
小林茂
小林亘
近藤良雄
佐藤勝弘
佐藤孝
佐藤貞夫
三林輝夫
三林美奈子
柴沢大五郎
清水正夫
白井三雄
城田勝司
鈴木達昭
関英一郎
高橋貞夫
滝沢敏郎
田中実
田辺建一
寺崎武徳
中野三義
難波勝平
南場良博
根津重行
野崎睦美
八田征夫
早川潔
半澤貢
伏見勝也
藤井青
堀川芳男
本間忠彦
本間英男
松本美智子
丸山一敏
宮川忠和
村山黄三郎
山岸美津子
鎗居成治
吉井士郎
吉田治彦
吉田穂積
渡辺正宣

66回　S33年

青木一男
青木忠允
行形和也
池政男
池田葵
居城三郎
今井正雄
薄田芳丸

井上幸衛
今城信敬
岩倉徹
岩瀬玲二
上田宏
浦野説衛
江口直禎
遠藤昭伍
遠藤芳幸
逢坂七郎
大竹多計二郎
大沼淳
大野利夫
岡田弘夫
小田一彦
織田瑞谷
折戸善衛
笠原健一郎
粕川正之
加藤勝則
加藤吉策
金子昌次郎
岸野健一
北村晴四郎
木村直平
久保田剛敏
小嶋芳郎
古寺嘉夫
小林隆太郎
近藤源也
斉藤恒
坂井恒雄
佐藤晃威
島宗栄一
清野誠二
高塚勝吉
高橋忠
高原哲雄
田中孝
田中陽一
中山昭一
庭山六郎
野沢英雄
畠山茂
早川潔
原英二
伴昭彦
藤井泰介
星野健二
堀藤四郎
松井昭吾
三崎正一
皆川正男
村川順三
目黒剛
山崎洪二
山本幸正
横山芳郎
若槻馨
若松伸一

渡辺友也
渡部義一

57回　S24年

清川担
駒形勇松
鈴木廣
中野進
福田克彦
藤村洋
室谷昇平

58回　S25年

青柳廣士
赤塚行司
阿部隆
荒井英夫
五十嵐治
池田成義
植村末哉
歌代壮平
内山準之助
遠藤整治
遠藤照雄
大関允良
大山芳郎
岡田耕衛
小熊勇司
風間庫一郎
笠原忠克
片桐欣哉
片桐啓三
加藤高広
金沢栄二
金子忠
木村善章
倉嶋紀夫
小林一男
小林正吉
近寅彦
近藤信夫
斉木利雄
斎藤茂
坂井春夫
坂井熙一
佐藤明夫
佐藤俊夫
佐藤俊彦
佐藤弘
篠田良一郎
白井博
庄司裕
曽我浩
高田龍介
高橋昭吾
竹前孝二
種村祥一
中村均
中川弘
永井勝雄
永井克孝
波田野松重

浜田正昭
早川哲夫
早澤良雄
平田次彦
平山詩郷
藤崎茂
福島惣吉
福田利雄
堀新二
堀内俊夫
本間庄二
前田三郎
間島速雄
松浦祥夫
宮川幸司
宮沢昭
望月和明
本永祐嗣
諸橋新
矢野教
山崎克己
山田寛
山谷皓榮
行田宏
吉田乙弘
渡辺達夫
渡辺豊悦
和田憲雄

59回　S26年

相川義信
青木久馬
旭祐善
安食裕夫
青柳実
安倍邦造
新川滋
飯塚実
飯村康一
五十嵐哲夫
五十嵐正男
池田修次
伊佐修
市川鉄夫
伊藤瑞
井上俊男
岩永伸
宇佐美裕三
牛木素吉郎
園城英二
大川健
大島洋一
大野敏行
岡田久
小熊英夫
小柳佳一郎
笠井駿
金巻久
唐津和雄
河合徳寿
川上昭八郎

川上忠男
神田悌三
菊地晴彦
菊池文雄
菊地裕
木口一二三
清野孝一
櫛谷全一
倉品克明
栗林貞夫
栗林重夫
栗林貞一
栗林洋
小池和男
河野誠
小城一廣
小島道夫
小林栄作
小林圭次
小松原金二
小村幸久
斉藤洋
笹川一雄
佐藤純一
佐藤進
佐藤吉雄
茂泉喜彦
重野行甫
品田茂博
渋木幸三
島崎穀
白井三男
鈴木誠一
関根彰圓
関根亨
高橋剛一
高橋晴夫
高橋正利
高橋陽一
高見忠
高山昇二郎
竹山諒一
種岡健
塚田俊夫
中野文郎
中野誠
長島一郎
納谷喜郎
西野武
西脇論
能登省三
畠中勝
花井進
早山康之
樋口卓
広川均
藤田八郎
藤由学
藤原幸雄
堀川兵一

松本俊彦
三崎良次
皆川潔
諸橋丈夫
八島敏哉
山崎徳左衛門
山田一介
山宮英世
山吉一成
吉川篤
吉川文夫
吉田陽吾
渡辺敏男
渡辺初男
渡辺満
小野寺宏

60回　S27年

阿部彰
井海孝
五十嵐邦一
五十嵐弘
池浦厚司
池端哲
石川紀一郎
石黒忠士
市川豊
入山文郎
上杉雅之
内山真一
大井忠史
大田英男
岡村嘉志
小川秋実
奥田達也
落合夏樹
甲斐佐智男
加賀田實
笠原功
片岡眞
金山常吉
河田鉄雄
神田三夫
切貫久司
櫛谷不二男
熊谷忍
熊倉正司
熊倉登
熊田彰
玄間敏雄
小石光夫
小出直
小島洋吉
小林庄一郎
小林進一郎
小林亨
小林智明
小林松保
小山功
後藤雅彦
斉木守雄

斉藤邦夫
斉藤卓史
坂井丈夫
佐々木城
清水梯作
志佐致
杉山一教
鈴木章司
高城英雄
高野昌三
高野信之
高橋篤生
高橋貞夫
高橋進
高橋栄明
高橋正樹
田中浩一
田辺寛
田部幸夫
玉木文夫
田村和郎
戸川正弘
富山和夫
徳田浩一
富田悦治
富山佑男
豊岡隆
中村信夫
長橋洸
成田禎作
西脇満
野村保夫
橋本行雄
長谷川秀三
長谷川信夫
浜田達三
早武正博
平田大六
広瀬鉄次郎
福田博
藤田重夫
藤本剛
星野昭夫
星野昇
堀浩一
本間一浩
丸山敏視
水野哲雄
宗村健吾
向井和夫
山崎健
山崎達男
山崎峯平
山崎良一
山本淳夫
吉田栄男
渡辺修
渡辺晃二
渡辺正雄
渡辺祐吉

61回　S28年

赤堀和郎
朝日明
浅間道子
浅見昭史
安宅久憲
阿部徳次郎
阿部富男
池田元嘉
石井淳
石井壮一
石見達夫
石山謹治
居城慶一
伊藤英子
伊藤良介
猪間驍太朗
今井晃
岩崎孝雄
江口良助
江村隆三
太田賢輔
太田二郎
大滝儷子
大塚為和
大野恭信
奥村啓一
片桐信康
加藤栄一
金子章
川井達夫
川崎栄一
川田賢一
河辺明彦
河辺全也
岸田哲男
北村富士雄
木村昇
木村政雄
熊谷隆幸
小池弘
小出廣記
小嶋哲夫
小杉秀一
小林貞夫
小林元雄
小山善郎
斉藤義明
坂田安之輔
佐々木繁
佐藤敏夫
佐藤眞武
三條和夫
塩谷明
柴田實
柴野良一
清水淳栄
須貝伸三
菅原和明
助川孝雄

水本正弥
宗村久
山口正十三
山口実
山崎武
渡辺純
渡部松生

50回　S18年

五十嵐喜八郎
五十嵐清
池田成徳
池田信彦
石崎浩
石田卓也
一柳俊夫
伊藤行
犬井政榮
今井弘
岩男仁志
岩沢信夫
江口晃
逢坂卓男
大石正信
大川正彦
大津匡
岡田一郎
岡田務
勝見秀也
垣原誠
片岡信二
金巻昇
上村光司
刈部洋太郎
神田正弥
北村豪郎
轡田勝弥
木下廣左右
黒川恒男
小島松榮
小林淳郎
三部善啓
渋谷武
白井悦郎
関文雄
瀬谷誠
高橋修
高橋忠行
竹田忠夫
竹本吉夫
田代悌吉
田中賢治
田辺尚雄
大黒善弥
敦賀博
鶴田寛
寺田秀夫
時田勇司
中川赫雄
中林茂之
中村一郎
中村晴信
中村亮宏
梨本薫
根本洋一
橋本正
長谷川健作
長谷川陽三
原田敏雄
馬場賢一
広川実
広川吉次郎
福原久
藤井義良
布施栄明
古川聡
堀信誠
本間生
前川懋
真柄三夫
松原明
三浦五郎
水野哲郎
宮崎春一
宮島新
武藤一男
村山一
山川久明
山岸芳郎
山田璋治
山田英世
吉澤績
吉村武郎
渡辺欣次
渡辺進

51回　S19年

青木博夫
朝倉蓮城
浅見信夫
厚地武
荒井奥弘
五十嵐健之助
伊狩喜与志
池田正司
稲川豊
今泉笑顔
稲葉勉
岩城剛一
上原昭彦
歌川正博
永木昭治
大川宏
大関雄策
大滝映夫
大山龍蔵
岡村安雄
岡本耕治
小黒昭六郎
笠井謙
笠原仰二
勝山新爾
金子富策
河内研太郎
河路渡
川瀬熙
北村茂
小林慎治
小林欽一
小宮富郎
斎藤素一
斎藤了
坂野上啓
笹川重男
嶋岡強
島田晋
菅野浩
鈴木誠二
巣山恵人
相馬隆二
高橋義和
田中敏朗
田中秀夫
田中泰雄
谷川隆朔
千葉繁太
西脇新一
野瀬弘一
羽賀栄次郎
長谷川直大
波多野勇松
花井省次
早川義寿朗
平澤庄一
藤井一郎
藤井英克
藤由寛
細貝繁男
真島建
真野量次
丸山幹男
皆川浩
三村一郎
宮島芳郎
村上安仁
百川和雄
八木野恒夫
山田精一郎
横木義男

52回　S20年

青山秀
阿部秋由
阿部和夫
阿部晃介
阿部次夫
安藤一郎
安東道夫
石崎昭一
磯康彦
大関隆男
大野潤豊
岡崎昭児
奥山實
小熊鐵哉
小黒和隆
乙川良英
折戸睦男
加藤尚八
川合賢吉
河端昭二
菊地定一郎
北嶋益二
小嶋嘉彦
斎藤茂美
斎藤志郎
斎藤兌
斎藤泰五郎
坂井和夫
佐藤昭三
佐藤太吉
佐藤秀夫
佐藤陽二
佐藤隆三
里見義泰
澤田義郎
椎谷正男
塩田欣彌
柴田利一郎
真保禎二
鈴木昭
関口次郎
高橋良雄
田中昭治
田中長助
田中序雄
筑波龍子
坪谷誠
富取徳夫
中川義郎
永井淳一
成田昭一
野崎一朗
丹羽昭
能登彰夫
橋本義行
長谷川玄一
早川泰之助
廣川勲
廣川昭二
藤田礼一
古川幸夫
星野孝
細貝敏雄
本田等
本間英治
本間昭三
三井田彦二
皆川洋作
宮尾益昭
村川修二郎
村島滋
村山玄二郎
森重郎
森田利哉
山川能夫
山崎利兵衛
山田一弥
湯木昭二朗
吉田孝
吉田越
渡邊亘
渡辺千春
亘隆

53回　S20年

浅海典
阿部定一
阿部靖朗
荒木典雄
飯島懿良
飯野俊栄
石黒達也
石沢嘉彦
板津堯
一柳邦男
稲月作之助
今立元
岩永千年
岩原昭
上杉純一
内山昭三
大倉憲吾
大滝侃市
大谷邦夫
小黒昌夫
片桐憲吾
河合忠衛
菊地武
小島久雄
小林茂孝
小林武
小林松郎
近泰男
坂井武夫
桜井智
笹川惣之助
笹川徳義
佐藤昭太郎
佐藤良策
篠原長一
白井勇
白井道夫
鈴木俊英
鈴木隆造
関弘二郎
関根光雄
高木秀夫
高橋英一
高橋勝彦
高松和丸
高山義一郎
田崎国夫
玉木将二郎
丹後源太郎
長道雄
津野務
中島常雄
中村弘道
中山政夫
長場雅
野口国典
野口俊作
野瀬寛次
野田栄次郎
橋本一弥
長谷川喜作
原田昭男
平木利弘
広沢功
福原昭平
藤正彦
藤田英治
藤田秀夫
本間敏雄
前川治一
正木宏
桝潟昭夫
増山隆司
松本伸一
三野昭三
盛山淑郎
諸橋莞治
山作房之輔
山崎典夫
山田豊
岩沢典夫
渡辺義隆

54回　S21年

55回　S22年

青木正作
石橋丈夫
磯部昭一
梅澤修
小松一義
斉藤雅彦
寺崎哲夫
保倉修
保倉保興
細野助栄
本田茂
青山昭郎
浅妻昭三
阿尻威吾
新井省龍
石本林三
伊藤健二郎
今湊良敬
芋川敏彦
大島壮一
片岡啓一郎
片桐武昭
勝見聡也
金井良司
金子隆弘
川井和夫
川崎貞夫
川又敏郎
倉茂周明
小島健一
小林一彦
小山和夫
斉藤健一
笹谷哲也
佐藤正紀
庄司元一
渋木登
新藤仁一
鈴木俊雄
砂山晃
関根博
早福卓
高橋弘
高橋安
田村一郎
千葉繁治
土田達禅
常木剛
等々力和男
富所寿男
外山清
中田繁夫
中村幹男
中村昌麿
西脇進
長谷川直人
長谷川政彦
平山顕二
星井正春
本間義治
前田利雄
真谷誠慧
松浦徳雄
松本明芳
三井田彦三
三村一男
宮尾益敏
武藤輝一
村山義夫
守口一郎
山崎賢二
山田甚平
山田源行
吉沢有介
吉田哲雄
吉原賢二
米山俊彦

56回　S23年

朝比奈和三
阿部弘昭
網干道雄
荒川昭寿
伊藤泰夫
市川久純

平成十四年度青山同窓会会費納入者名簿

（５月より12月まで納入済みのもの）
未納の方は３月までに納入下さるようお願いします。
１口1,000円。なるべく２口以上でお願いします。
（郵便振替口座　00650-7-4455　青山同窓会）

31回　T13年
守口東平
32回　T14年
霜鳥重策
曽我英彦
33回　T15年
川上英三
長谷川友康
山添三郎
34回　S２年
江部保治
神田坤六
清野義弘
佐野清
相馬貞蔵
堀保利
35回　S３年
内田善衛
岡四四亥
尾崎三夫
近藤百之
寺田利男
36回　S４年
石橋健男
今井二雄
風間忠雄
金井宣夫
田中武
37回　S５年
猪坂三郎
黒川武三郎
鈴木正二
高橋正敏
田中俊二
田中正二
野末武夫
馬場幸一郎
38回　S６年
池田正昭
大沼正一
桶谷勇策
小林三郎
近藤円
澤野十蔵
関屋俊彦
高野政夫
竹石三男
田村勇作
中村実
吉田昭平
渡辺義平
39年　S７年
上原虎雄
大野賢二
岡崎清彦
鎌田輝虎
川崎孝治
小林芳輔
佐藤平八
野沢正一
福山健
本田正三
宮村定男
山下八郎
40回　S８年
会田俊雄
上野道隆
倉田浩吉
児玉親典
小山賢市
後藤功
斉藤久
池主憲
中村年夫
真柄慎平
山田金次郎
湯浅市作
吉井典
41回　S９年
阿部久二
五十嵐富郎
伊藤一雄
今成隼治
上原喜八郎
金子清
鎌原保之
神田明
洪野玄彰
高田弥彦
高橋正蔵
高橋英雄
高橋正道
富沢五郎
野末正二
布施栄信
八木勝
山田弘
42回　S10年
石井崇
今井包和
薄田開元
大谷友之助
岡田龍雄
片山彦三
北村惣一郎
小泉俊平
佐藤勇
佐藤政治
塩谷正雄
高山一豊
田中正吾
塚野俊二
東城真佐男
西山秀夫
灰野秀康
長谷川頼清
広沢斉
星野祐
前田隆英
森山敏雄
43回　S11年
阿坂英夫
市橋敏雄
梅田悌次
小沢省三
小野寺稔
鍵富馨
片山愛介
加藤行輝
菊池芳郎
木口正雄
笹川謙録
佐藤繁
佐藤和吉
里見義忠
佐野真一
高木喜三
高橋一久
滝沢義雄
田中一郎
田中憲司
浜田昌栄
早川陽
早船春洋
丸山直威
森田五郎
山谷隆二
山際正雄
渡部一郎
渡辺千尋
44回　S12年
池田元之助
今井仁
遠藤健一
小原康作
片桐繁作
金子一夫
小池寿哉
小泉大三
斉藤三郎
斉藤伸雄
坂井健一
佐藤敬雄
相馬百合彦
高野伸三
高見賢次
田中邦彦
寺田由永
中村健
七尾健一
錦織登美夫
西山尚三
早川広吉
平原芳郎
星野圭
本田一郎
前山金一郎
峯木鉄夫
宮川一郎
宮沢正彦
村山敏夫
山田顕夫
山田英政
山根俊英
45回　S13年
青山基三
阿部敬宇
石崎政治
石原八十秋
稲葉敏郎
小原稔
笠原義春
柏崎賢太郎
金井弥寿郎
金澤武
川村明義
小島平弥
酒井敏行
坂爪力
捧孝平
白倉丘
渋谷芳二
志村俊夫
関崎睦男
滝沢久衛
知野正
寺山恒夫
中村国男
中山仁
橋本良材
長谷川渙
長谷川健次郎
治雅樹
古川敏雄
本間泰輔
圓山哲四郎
丸山泰雄
山際昌介
錦井兵衛
渡辺節夫
渡辺喜夫
46回　S14年
安沢惣平
稲野藤三郎
上杉栄一
江口松弘
大津任
小熊幸男
鍵富春雄
片桐英一
君正男
熊谷大輔
栗原道樹
小山崇熙
佐藤正利
下勇
菅原一房
関慧夫
高橋敬吉
近沢一
椿一郎
富所強哉
中田紳一郎
原泰三
馬場吉衛
伴恭
樋浦幸喜
広川敏郎
藤巻貫
堀川良平
本田富雄
峰木照夫
山田市男
横山隆二
米原進
47回　S15年
朝日翠
青山信一
石垣邦武
伊藤元司
岩谷又武
小田宏治
岡村茂
金子淳
木村和郎
倉井整
黒川一男
古寺鴻
斎藤暐太郎
佐野広
志賀武司
清水善夫
菅井隆一
杉山弘治
杉山正彦
高梨正夫
田村輝彦
鳥居俊夫
中川敬康
中川保
中野忠雄
中村正秀
新津義雄
広川博
藤田三之助
本間日吉
丸山銕治
森田美寛
山際政次
吉田富忠
48回　S16年
秋元俊明
天田孝平
飯塚正雄
五十嵐晧太
伊藤正太郎
江口正喜
大谷一男
小川清常
樫木基
北村英朗
小池清泰
斉藤力
佐藤忠一郎
佐藤素一
杉山静也
諏訪宏
高松利男
田中利男
土田節也
東城次郎
内藤啓一
中村英治
中山真
野崎亀六
広瀬努
本間五夫
本間潔
真嶋明
水戸正郎
南緑八郎
宮崎心一
望月彰
八木正
山口愛正
山崎修
吉川三吉
吉沢宏美
渡辺鎮作
49回　S17年
赤松元敏
阿部東
飯島三良
池田真吾
伊藤光一
稲泉武男
井上正
逢坂邦雄
逢坂猛男
尾崎富衛
江間正二郎
乙川順二
梶山勝清
梶原計佐
亀山宏平
木村竜一
倉田資孝
見定民雄
小林幸男
駒林行弘
斉藤敬治
斉藤俊八郎
酒井忠正
佐藤武雄
佐藤博
佐野仁三郎
清水直彦
白川保
鈴木三郎
関富治
高橋幸一
高橋正弥
高山昇一
滝沢信義
竹山行雄
田沢和内
田中久盛
池主淳
外山芳夫
中村五郎
中村廣徳
永松一久
南木三代也
仁保武人
南木三代世
庭山清八郎
畑新次
羽田俊夫
林文夫
原猛
原田湛玄
馬場三郎
広川弘
弘中博元
藤田芳郎
舟崎裕二郎
細野耕爾
堀證護
堀祐久
堀内憲政
本田正胤
丸田貞介